

◆ たなばた ◆

その高校の吹奏楽部は、私が在籍していた頃も（幸いなことに）顧問として携わっていた頃も、定期演奏会で顧問が指揮することはなく、生徒が主体的に（？）活動していたものだった。もうそろそろこの学校から去らなければならないなあと考えていた頃、生徒たちに一つだけわがままを言った。

「一曲振らせてくれないかなあ・・・」

今もそうだけれど、吹奏楽部の定期演奏会は3月の春休みに入るか入らないかの頃。ちょうど異動の時期でもあるし、自分も一区切りをつけておきたかった。

素直な（??）生徒たちは、結果「いいですよ」と言ってくれた。

振りたい曲は決まっていた。酒井格（いたる）さんの『たなばた』（正式なタイトルはThe Seventh Night of July）。

酒井さんが高校生の頃の作品とのこと。魅力的なメロディーが次々に現れるEs durから始まる曲想が純粋に好きだったこと、部長だったKさんがアルトサクソ担当で、ちょうど中間部にこの楽器の素敵なソロがある（加えて、副部長N君のユーフォニアムのオブリガートもある！）。高校生の彼らが演奏するのに最も相応しく、きっと思い出に残るだろう、と考えた。

上に記したような経緯もあり、彼らとの練習中の何気ない会話の最中にも、もうこんな会話もできなくなるんだなあ、と感傷的な日々が続く。

そして定期演奏会当日。楽譜にないホルンのベルアップや思い切りルバートをかけたオーボエへの指示など、多分生徒達は面食らったであろう。しかし、しっかりついてきてくれた。ありがたかった。演奏中の彼らの表情は今でも鮮明に覚えている。

当日の演奏のCDが残っている。8分35秒……。恥ずかしくてあまり聴きたくないが、時々聴きなおす。

異動の内示が出た後だったが、Kさんが私を呼びに来た。

「先生、もう一回振ってくださいませんか」

少し面食らった。「定演のようにもう振れないよ。（自分の中では）あの時で終わっているんだから・・・」と言いたかったけれど言えなかった。そのまま部室に行き、もう一度振った。ほとんど下を向いたままだった。とても失礼なことをした。

離任式の際、彼らから色紙をもらった。こんな言葉があった。

「僕にとっての音楽って僕にとっての宝物だと気づきました。世界中のどんな高価なものよりもずっとずっと、価値のある宝物であると・・・」

宝物のような時間をくれた彼らにとっても感謝している。今も元気であることを願っています。



あれから20年近く経った。『たなばた』は、きっとこれからも高校生たちが大事に演奏し続けていくことだろう。本校の吹奏楽部の演奏に期待している自分がいる。どんな音になるだろう？

今日は七夕だ・・・